

## 医療ルネサンス No.8608

## 膝関節の治療

4/6

## 置換手術 最後の手段

「色々手を尽くしても駄目だった。人工膝関節の手術を受けて、ようやく改善した」。堺市の小泉益枝さん(76)は振り返る。

60歳を過ぎ、左膝が痛み始め、近くの診療所で変形性膝関節症と診断された。膝の軟骨はすり減り半月板も損傷していた。脚が外側に湾曲するO脚も表れた。

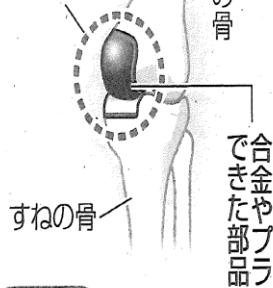
グラウンドゴルフの練習をする小泉さん(堺市で)



## 人工膝関節の仕組み

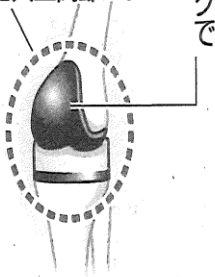
## 部分置換

一部だけを人工関節にする



## 全置換

全体を人工関節にする



症状は少しずつ悪化し、「ガラスの破片の上に膝を押しつけているよう」な痛みを感じることがあった。横断歩道でも、痛みが急に表れて渡りきれなくなるのが怖く、信号機が青になるタイミングを待ち、渡る時間を確保した。

痛みを取るヒアルロン酸の注射をしはらう続けたが、効果は続かなかった。血小板を使う自由診療も試したが、良くはならない。知人から痛みが取れたと聞いていた、膝関節を人工関節に置き換える手術を受けたいと、診療所の医師に伝えた。実績がある**阪和第二**

泉北病院(堺市)の**阪和人工関節センター**を紹介された。

手術では、膝にあるももの骨とすねの骨の表面や、傷ついた軟骨を削る。そこに合金やプラスチックでできた人工関節をかぶせる。膝関節の状態によって、全体を置き換える方法と、内側か外側のどちらか半分を置き換える方法の2通りがある。

小泉さんは、左膝の外側の軟骨が残っており、**同センター総長の格谷義徳さん**から、内側半分を置き換える方法を勧められた。術後に膝を動かせる範囲は比較的に広めで、膝の動きに違和感が少ないという。

71歳で手術を受けた。回復は早く術後2週間で退院、3か月後には仙台市に旅行に出かけた。ただ、O脚は解消せず、湾曲した形が気になった。

その後、左膝をかばうように歩いた影響で、右膝が痛むようになった。「右脚はO脚も治したい」と希望し、膝全体を人工関節に置き換える手術を受けた。手術の結果、右脚はまったく平な形になり、小泉さんは満足している。今は両脚ともに痛みが改善され、週3日、夫とグラウンドゴルフを楽しんでいる。

人工膝関節は耐用年数が15〜25年とされ、再手術を回避するために70歳以上の患者に使うことが多い。術後に膝への負荷が軽い水泳やサイクリングをするのは可能な一方、正座や、強い負荷がかかるランニングをするのは難しくなる。

手術後に骨がもろくなる、人工関節と骨との間に隙間ができて、人工関節がぐらついてしまう。そのため薬を使うなどして、骨の強度を保つ必要がある。格谷さんは「他の治療法を試して効果がなかったときに最後の手段となる」と話している。